

陰謀社会論ふたたび —未発表論文と大学紀要の効用—

Intrigue Society Revisited —The Effects on the University Bulletin of Publishing As-yet Unpublished Papers —

日置 弘一郎

HIOKI Koichiro

要旨：これまでの研究生活の中で、未発表に終わった論文がいくつかあり、それがなぜ発表できなかったかの経緯を述べ、その理由について考察する。未発表に終わった論文は重要な論点であっても、既存の理論体系ではまだ問題にされていないテーマであり、それを学術誌に受け入れさせるためには工夫が必要である。結果として未発表になった。他方で、学際的な性格を持つ研究機関ではかなりの異質な論文でも受容され、その意味では大学紀要は意義を持つ。

【キーワード】 不条理、大学紀要、未発表論文、ノーマルサイエンス

Abstract : In past study life, there are some articles that finished being unpublished. The process that why it was not able to announce and consider the reason. Even if the article that finished being unpublished is the important point at issue, it is the theme that has not been yet assumed by a problem, and invention is necessary for the existing theory system to let an academic journal accept it. As a result, it became unpublished. On the other hand, even a considerable heterogeneous article is received in the research organization with interdisciplinary green character, and the university bulletin has significance in this sense.

【Keywords】 absurdity, university bulletin, unpublished article, normal science

1. 未発表論文

「陰謀社会論」とは筆者が1985年に書いた論文のタイトルである。現在にいたるまで未発表であるが、この頃筆者は未発表論文を四編書いている。なぜ未発表になった経緯を学問的経歴の最終段階で開示しておきたいと考え、本稿を執筆した。

最初の未発表論文は「試験を通してみた学生の日本的集団観」というタイトルである。この論文は関西の私立大学から九州の国立大学に転出する前後で二つの大学の学生を比較する意図を持って同一の問題を定期試験に出題し、その結果を解析することを試み、その結果を示すものであった。

この試験を思いついたきっかけは関西の私学で、学生の水準が低いといわれていた大学でありながら、電車内で学生の阪神タイガースの戦力分析があまりに論理的で鋭いものであったので、学生の関心を引く素材であれば分析の水準が上がるのではないかと思いついたことがきっかけであった。一般にFランク大学と呼ばれるような低評価の大学では、学生自身が学問について能力がないというよりも、学問的状況での思考様式を最初から放棄してしまっているという傾向が強い。いわば勉強モードに入ったとたんに思考停止状態になっているといえる。それならば、材料として自分たちの関心を持っているテーマを出してみたらどうか。

材料として選んだのは、当時評判になっていたいしいひさいちの漫画「がんばれ!! タブチくん!」である。タイガースのゴトー監督が成績不良からシーズン後の更迭がほぼ確実という状況で、監督のお別れパーティーの相談をあつかったものである。主力のタブチくんが会費の負担の相談を選手たちに持ちかけると、さまざまな議論が出され、結局まとまらなくてパーティーができないことをタブチくんがゴトー監督に報告に行く。ゴトー監督は「状況はワシが一番よく知っているよ」と返すという漫画である。この漫画の中での発言は、「わいわい」や「がやがや」まで入れて20あり、「発言の中で日本の集団の特性を表していると思われるものをあげ、それがなぜ日本のかを論じなさい。」という設問がなされた。発言には、他球団から移籍してきたエモト選手をなじるものや、当時新進のカケフ選手の発言を抑えようとするもの、一軍と二軍の差異を強調するものなどがあり、日本の集団を論じる材料として好適であるといえる。

この試験を大学移籍後の九州の国立大学でもまったく同一の設問を行って、両者を比較した。分析としては、選択した発言をダミー変数として、因子分析を施した。学生の日本的集団についての意識に関する潜在構造を論じるためには適切な分析手段であるといつてよい。さらに、一軍二軍の身分差やよそ者とか新参といったようなこれまで指摘されてきた日本的集団についての議論、つまり、正解の因子が現れたのは九州の国立大学のみであり、関西の私立大学ではこれは因子として現れなかった。このことは、二つの大学の学生が異なる意識構造を持つことを示しており、二つの大学の訓練の差を示しているといつてよい。つまり、学問に最初からあきらめてしまい意識的に訓練を避けるという可能性が示唆され、意識のレベルでも異質な潜在構造が示されているといつてよい。

問題は、この論文の公表である。九州の国立大学の大学紀要に掲載しようとするが明確にはないが拒否されてしまった。論文が比較的長かったこともあるが、最初のページに漫画が掲載されている論文に対する拒否であったように思える。伝統ある国立大学経済学部紀要に漫画が掲載されることに対する抵抗はかなり強かったといえるだろう。このために、掲載可能な場所を探しまわった。結局、掲載されたのは1989年に刊行された日本の組織というシリーズの別巻であった。このシリーズは当時、経営学でベストセラーになっていた「エクセレントカンパニー」の日本版をつくらうとするもので、大判の全16冊のシリーズである。企業だけではなく、行政組織から教育組織、宗教組織までを網羅しようとする大きなシリーズで、中核となる企業の部分は旧商科大学出身者が

編集を担当していた。筆者の割り当ては、経営学では専門家がない「伝統と信仰の組織」という巻で大阪大学塩原勉先生と一緒に編集を行った。全体の企画は松岡正剛氏であったが、この巻の編集を気に入って、理論部分を別立てにした、「ネットワーク時代の組織戦略」(今井・塩原1988)に松岡・塩原、日置・松岡の対談を掲載し、さらに別巻での論文が依頼された。ここに未発表の論文の掲載を行った。しかし、そこでの掲載は数理分析部分を省いた抄録であり、全体は未発表にとどまった。さらにこのシリーズは一冊の価格が八千円というもので、基本的には個人が購入するのではなく、取り上げられた企業などの組織が購入することを期待したシリーズであった。このために、ここに掲載しても、ほとんど読者は期待できなかった。

また、掲載先を探す一方で知り合いへの回覧を行った。当時は経営学でダミー変数の因子分析を理解してくれそうな経営学者はほとんどいなかったもので、勢い社会学者に回覧することになった。ここでずいぶん高い評価を受けた。しかも、かなり異なる領域から評価されたのは意外であった。数理社会学を専攻する学者からの評価はもちろんであったが、これと対極の現象学的社会学を専門とする社会学者からの評価である。彼らは、会話分析のメタ分析としてこの論文を理解したという。確かに、学生が会話分析を行い、その分析を分析するという方法はこれまでになかったものである。しかも、この方法は、主観主義的社会学での方法での難点であった主観の妥当性を確保しにくいという点を解決したものであるといつてよい。意図して行った分析ではないが、かなりの刺激になったことは間違いないだろう。後日初対面の社会学者から声をかけられることもあった。

2. 京都学派

次に未発表論文になったのが「陰謀社会論」である。この論文を書いたきっかけは、通産省(当時)外郭団体の産業研究所が主催する藤沢プロジェクトの研究会に入れてもらったことにある。これは、日本の経済政策についての基礎研究を行うための研究会であり、さまざまな視点を確保するために、京都大学関係者を中心とする研究会を含めた視点を確保しようとするプロジェクトであった。京都大学の藤沢令夫教授を研究代表者として、河合隼雄・米山俊直・坂本賢三・瀬地山敏・鈴木良次・塩原勉・濱口恵俊というメンバーに入れてもらった。テーマは「日本人の組織観に関する研究」というもので、一世代上の研究者の中で一人若手として入れてもらい、ずいぶん勉強になった。

この研究会は、藤沢令夫という研究者に日本社会についての基礎研究を自由に行わせようという趣旨で、東京中心ではない発想を求めるものであったといえる。一つのテーマについて三年程度で結論を出し、それがかなりの期間にわたって継続されていたらしい。たまたまテーマが日本人の組織観というものであったために組織論の専門家として塩原勉先生と一緒に研究会に入れてもらったという経緯であった。潤沢な研究費を持ち、読むべきと思われる書物をメンバーに配布してくれ、必要なゲストを呼ぶこともできる。ゲストとしては、清水博や丸山孫郎といった当時の最先端の論客を呼んできている。何よりも、この京都大学のいわゆる京都学派と呼ばれる中でのスターの中に混じって議論できたことが大きかった。藤沢令夫という人は、一般にはあまり知られていないギリシャ哲学の専門家であるが、狭義の京都学派（哲学）だけではなく、広義の京都学派においてもキーパーソンであり、大きな影響力を持っていた。

筆者自身は京都学派に属すとはまったく考えていなかった。広義の京都学派は基本的には桑原武夫と今西錦司の人脈による系譜であると考えていたし、その後継である梅棹忠夫・梅原猛の人脈がそれを増幅したものであると理解していた。桑原、今西の両氏には会ったことがないし、梅棹・梅原という二人とはさほどの接点はない。梅棹氏が創設した国立民族学博物館（民博）、梅原氏がつくった国際日本文化研究センター（日文研）の双方の併任教員をしながら自分自身を京都学派と思ってはいなかった。実は、この二つの国立機関は併任ポストを多く持ち内外の研究者を広く招聘しているが、両方の併任をした経験のある研究者は非常に少ないらしい。皆無ではないとしても、筆者以外に両方の併任になった研究者はほとんどいないと聞いた。広義の京都学派の拠点であるこの二つの研究機関の併任をしながら、京都学派の自覚はもっていなかった。

ごく最近になって、藤沢令夫という人の役割を思い返してみると、京都学派全体に大きな影響を与えていたことに思い当たり、梅棹・梅原の系譜には間接的に影響を与えていたと考えると、藤沢プロジェクトは京都学派の中核と考えることができることに気づき、自分が京都学派に影響されていることの自覚が生じた。学派という認定は特に必要があるわけではないが、弟子に聞かれた時に説明できることは必要であるだろう。学派といっても、パラダイムを共有しているというわけではなく、緩やかな共通性を持っているといった程度のことであり、広義の京都学派の場合は共同研究という研究のスタイルを共有しているという点にあるといつてよい。これは人文科

学研究所での研究スタイルとして開発され、メンバーおよびゲストの報告と討論があり、一連のセッションの後に報告書を出版するという手順で進んでいく。共同研究は民博で制度として整備され、日文研に波及しており、藤沢プロジェクトでも採用されている。

この研究会の影響を受けて書いたのが「陰謀社会論」であった。藤沢プロジェクトでは、基本的に方法論的個人主義での還元主義的理論からの脱却という点が問題となっており、組織論の中では濱口恵俊による間人主義をいかに理論化し、拡張していくかという点が主要な論点の一つであった。このために、方法論的には当時話題となっていたアーサー・ケストラーのホロン概念や、発生学におけるゆらぎの理論、さらにセカンドサイバネティックスなど、還元主義に対立する方法的枠組みでの理論が論じられ、複雑系の概念を正確な意味で把握することができた。現在でも社会科学での複雑系の理解はかなりいい加減で、正確な意味で把握している議論は少ない。逆に、それが知られるようになった当時であるからこそ、正確な理解の努力が可能であったといえる。ケストラーのホロン概念と清水博のホロン概念はどのような違いがあるかなど、本人から直接に聞くことができ、さらにセカンドサイバネティックスの創唱者である丸山孫郎から直接に概念の意味を聞くなどの経験は貴重であった。

また、メンバーも間人主義の概念で個人主義とは異なる行動原理を提唱した濱口恵俊、地縁や血縁を拡張する形での社縁を提唱した米山俊直、集合的無意識を想定するユング派精神分析学の河合隼雄、さらに散在神経系で中枢を持たないヒトデが逆さまになった時に神経系が相互作用することで元に戻るというモデルを開発した生物学者鈴木良次などのメンバーを還元主義が定着する以前のギリシャ哲学を専門とする哲学者藤沢令夫が束ね、そこに組織論を専門とする塩原勉と筆者が加わったという研究会であった。これまでの個人が自由意志を持って組織に参入し、その個人から構成される組織像といった組織論とは異質な議論が可能なメンバーであったといえる。その中で自分がどのような貢献ができるのか、その結果が「陰謀社会論」であった。

この論文では、組織の中で構成員がさまざまな言説を繰り広げており、それが相互に絡み合っていく。他方で、組織は強制力を持っているために言説の統制がかなりの程度可能である。言説が自己組織していくと表現してよい状態である。ただし、特定の言説が庇護され、それに他の言説はそれに統合されていく。このような組織内の状況を前提として、組織構成員の間でポリティックスが進行する。どの方向に組織が漂っていくかは予測困難で

あり、成員は濃密な不条理の中に置かれる。この状態を陰謀社会と表現すると、組織内での言説空間の状況が理解できる。

さらに、組織成員にとってのポリティックスの手段は、単純な言説だけではなく、複数の意味を含むダブルトークによる言説である。一つの表現に複数の意味を持たせるような言説については、エリック・バーン1964によって提唱された交流分析で取り上げられている。彼は、フロイドの精神分析を簡略化した形での心理構造として、親・大人・子どもの三層を想定する。この三層の間でコミュニケーションが行われていると考える。妻が夫に、「今日は何時に帰るの?」と聞くのは、表層の情報を求めるコミュニケーションであれば、大人から大人へのコミュニケーションになるが、新婚の妻が同じように聞くのは背後に「あなた早く帰ってきてね」という子どもから親への甘えを意味するし、結婚後二十年もたった妻が聞く場合には「どうせ、今日も飲んで帰るんでしょう」という親から子どもへのコミュニケーションを意味する。一つの発話で複数の意味を持たせるような会話は日常的に行われており、皮肉や嫌みはほとんどの場合、ダブルトークの形式を取る。

このような言説を使いこなすことで、日常的な会話が成立していると考えられるならば、その意味の読み解きが問題となる。また、意味解釈のコードも複数を使い分ける必要がある。自分が所属している組織でどのような解釈体系が用いられているのか、それを知らなければ組織生活しきわめて不利になることも想定できる。人のコミュニケーションは本音をむき出しにしたものばかりではないことは明らかであり、既存の組織論でそこに踏み込んだ議論は見当たらない。

世界解釈という点では、組織に参入した場合に、これまでの世界解釈が有効でなくなった場合に、いくつかの対応が考えられる。世界像の改変は当然のように見えるが必ずしもそうではなく、シュッツ1962のレシピ知識のような世界像の構築を伴わない、きわめてマニュアル化された対応の体系に変えてしまい世界の解釈を浅くするという対応もある。シュッツは移民などで見られる、世界の構造を解釈するのではなく、現れた現象への対応でしかとらえないという態度があることを指摘し、その対応に必要な知識をレシピ知識と呼んでいる。例えば、穴が空いた貨幣は白い貨幣の半分の値打ちであるとか、必要最小限の対応で、世界解釈を含まない知識で埋めてしまう対応である。

既存の組織論の世界では、マニュアル的対応でのみ組織行動が形成されていると前提していたり(例えば、テ

イラーの科学的管理法)、あるいは世界解釈が最初から共有されている(官僚制をはじめとするほとんどの組織論)と考えており、複数の解釈が並行している組織を考えることはなかった。要するに、組織は複雑さを縮小する方向に機能すると考え、複雑さを増幅する装置としての側面を問題とはしてこなかった。現実にはこの二側面、つまり複雑さの縮小と増幅をともに行っており、それもなんらかの意図で行われることも少なくない。このような組織の状況は、組織内の構成員にとっては不条理が濃密化する状態と映ることになる。

論文としての「陰謀組織論」は藤沢プロジェクトのメンバーに配布し、さらに何人かの知り合いに配布しただけで未発表論文になってしまった。というよりも研究会メンバーに配布して好評であったためにそれだけで喜んでしまっ、発表については考えなかったといってもよい。論文としては長大であったこともあり、また、学術誌に掲載を求めるといふタイプの論文でもない上に、先述のように当時の所属大学の紀要で掲載を断られた実績があるために、最初から紀要は考えていなかった。現在、紙ベースでも電子ベースでも残っていないので、完全に幻であるが、奥山1991には未発表論文として引用されている。

3. 組織内の不条理

「陰謀社会論」のテーマである不条理の中の人間を引き継ぎ、さらに論文を書いている。「ハムレットの悩み」「阿Qの決断」「デオンの快樂」である。このうちで発表された論文は「ハムレットの悩み」だけである。テーマとしては、陰謀社会論での不条理の世界がどのような条件で生じ、それへの対応がどのように異なっているかについての議論を展開している。

「阿Qの決断」は劉1990をヒントとしている。魯迅はかなり意図的に仕組みを作り出す作家であり、劉によればQは弁髪象形であるとする。小説の中で阿Qは革命に参加する象徴として、弁髪を切るのではなく、弁髪を垂らすことをやめて巻き上げるささやかな革命派へのシンパシーの表明を行っているが、この髪型にしたことが革命派の動かぬ証拠として処刑される。ささやかな反抗が命を絶たれるほどの犯罪であるとは思えないが、中国の不条理は独自のものがあるといつてよい。

阿Qは、状況に振り回されると、自分の世界と周囲の状況の整合性を図るために、自分に都合なように世界を再解釈する。自分が殴られれば、殴られることを勝利と位置づける再解釈し、革命が起きれば自分を革命の主人公として世界を解釈しなおす。状況と自分の相対的な

距離を測定することによって、自分の世界を救い、自分のアイデンティティを確保するという方策が取られる。このような方策は、阿Qと周囲の不整合、阿Qの行動の一貫性の欠如を引き起こすものの、阿Q自身の自立にとって必要である。ただし、この方策は阿Qが状況に対して主体的に働きかけることをせず、状況の推移を後追いつけるしかないという点が問題になる。

阿Qのように、状況を自分に引き寄せて解釈すると結局は状況から抜け出すことができない。このように主体性を放棄して状況の後を追うことは、不条理への対処として一つの戦略を構成する。いわば動物が身をすくめるのと同様の態度であり、世界を構造化することをやめてしまい短期的な経験則のみで対応する。その日暮らしとしての対処は十分に有効な戦略であるが、これで長期にわたる人生を設計することは困難であることは間違いない。企業をはじめとする社会システムは、社会的な装置として周囲を構造化して、一つの完結した世界を構成するという性格をもっている。このためにその中に入るサラリーマンは企業が自分たちの将来をある程度まで構造化してくれるという状況にある。

これを利用して、事実上主体的な対応を企業に委ねて、自分ではまったく判断しなくてもよいというような、阿Q的サラリーマンになることは可能である。この意味で『サラリーマンは気楽な稼業』であることは間違いない。しかし、現在の状況では、企業自身がそのような構造化ができる力を徐々に失ってきており、不条理の発生を押さえ込むだけの余裕をなくしている。もはや、自分の将来を企業にすべて委ねて、企業内での昇進のみ考えていればよい、といことにはならない。

この論文はこの当時中国からの留学生が増大したためにかなり中国についての文献を読むことになった。とくに新島・加々美1990には不条理を生み出す装置としての国家という点で多くを得ている。個人的には加々美光行と親しい山田慶児、新島淳良の友人の北澤方邦と直接の接触があったことが理解を促進した。

4. 経済学部紀要

この論文を書く前後に九州から関西に大学を移籍した。「ハムレットの悩み」は移転に即して、最後の紀要論文として原稿を提出し、そのまま置き去りにしたので編集委員会としてもそれを却下するわけにはいかなかったのだろう。掲載されることになった。この論文を紀要に執筆してから二十年以上大学紀要に書かなくなってしまった。その理由は、大学が変わってから、学部長に呼び出され、「この大学の紀要は歴史のあるもので、高い

権威を誇っている。経営学も経済学に役に立つ論文を書いてくれ。」といわれ、「そうですか」と答え、そのまま紀要編集室に既に提出している原稿を取り下げ、以来、その大学の紀要にはまったく執筆をしていない。この学部長は何を考えているのか。中世における「哲学は進学の婢」ということばさながらに、経営学を経済学の一領域どころか、経済学に貢献するための枠組みであるとする態度に唾然としてしまった。

この人は経済学の歴史を知らないのだろうか、経済学は財政学から派生した学問であり、財政学はドイツ官房学の一領域として生み出されている。さらに官房学の起源をたどれば、淵源はドイツ家政学にある。これは荘園管理の知識の体系として生み出され、13世紀にはホーベルグの家政学大全という形でまとめられている。通常知られている家政学は19世紀アメリカでの家政学で、これは夫からもらう生活費をいかに節約して使うかというノウハウであり、ホームエコノミックスのエコノミーは経済ではなく節約である。ドイツ家政学では投資をいかに回収するかのノウハウであり、国家財政においてどこから徴税して、どこに投資すればよいかを考えるという財政学がその中核になる。筆者の大学院時代の指導教員はドイツ経営学を専門としていたので、本源的経営という概念を持っていた。これは実は家庭経営そのものを指している。その意味では経済学は経営学から派生した学問であり、科学の形式を整えることに成功(?)したために、優越的立場にあると思込んでいる状態にある。

経済学部の中での経営学蔑視は甚だしいもので、露骨に経済学では通用しないから経営学を専門としているといった態度の教員は少なからずいた。また、経営学の中にも経済学に対する劣等意識も少なからず存在した。ちょうど、この頃に法則定立科学とプログラム解明科学という区分を提唱していた吉田民人と会話する機会があり、面白いことを教えてもらった。それは、団塊世代から上の世代の生物学者は生化学や生物物理に対して劣等感を持っていたが、それが逆転しているという指摘である。つまり、生化学や生物物理が成立した頃には、生物学者では解明できない物質レベルでの反応過程が次々と明らかになり、生命現象の解明は還元主義的方法によって可能となると思われていた。還元主義的な方法を十分に訓練されていない生物学者は生命現象の解明から疎外されるのではないかとすら思われており、著しい劣等意識を持っていた。それが、1990年代から逆転して、生物学者が生命現象として解明する過程の一部を生化学や生物物理に下請けに出す状況になっている。つまり、エピジェネティックなDNAの発現プロセスなどを經由して、

後は機械的プロセスを追えばよいという状況になってからが物理学や科学の出番というわけである。実際に、再生医療や癌などの大きな科研（特定領域）では生物学者が代表者として、研究を統括し、物理学や化学の人間に研究費を配分するという構造になっている。生命現象の基幹的部分である DNA がいかに発現するかというプロセスは生物学者が、その後の機械的プロセスを物理・化学が担当するというわけである。

ちょうどこれと同じ構造が経済学と経営学でも当てはまる。企業経営が非常に複雑なプロセスであり、成員のコンテクストを調整した結果として意思決定がなされても、それがそのまま実行されるわけではなく、実行の際にそれぞれの成員の思い入れが付加される。経済学が妥当するのはこのような人間のプロセスが関与しない場面、つまり、何らの思惑を入れる余地なく特定の方向に従わなければならないという枠組みが成立している場合である。具体的には、生存のために必要な行動を取る、例えば、食料を入手するなどの状況では特定の行動を余儀なくされる。つまり、経済学は自分の思考を放棄した状態で成立するといつてよい。もっとも、経営学は生物学ほどには強力にプログラムの発動の機序を明確にする手段を持っているわけではない。しかし、複雑なプロセスを省略して還元主義的な過程として把握しようとしている態度に対抗しているという点では生物学と類似の立場にあるといつてよい。

いずれにせよ、経済学との落差は大きく、経営学固有の立場を認めない経済学者は多く存在する。自ら紀要には発表しないという方向を選択したために、未発表にならざるを得ない論文が増えてきた。「阿Qの決断」は自分のホームページにアップロードしたが反応は全くない。このために、少し派手な論文をと思って書いたのが「デオンの快楽」である。デオンとは、デオン・ド・ポーモン。18世紀に実在したフランス人で、ルイ15世の私的スパイとして活躍した。彼は女装してロシア宮廷に潜入し、スパイしていたとされる。人生の後半を常時女装して過ごし、女性であると信じられた時期もあったとされている。精神病理としてのエオニズム（服装倒錯）の語源ともなっている。

このように派手な人物を取り上げたら、ネット上でも読む人間が増えるのではないかと思ひ、「デオンの快楽」を書いてアップロードした。しかし、これもまったく反応はない。基本的には自己と不条理の関係を扱ううちに、自己概念が曖昧な状況を取り上げようとする議論であり、面白がって読む人間はほとんどいなかったということだろう。「デオンの快楽」は失われてしまい、現在は

復元も困難である。

「ハムレットの悩み」は公表された。この論文は、いくつか重要な論点を含んでいる。自由な意思決定がなされていることが組織論でも前提とされているが、ハムレットがデンマークの皇太子である状態を選択するか、父を殺害されて復讐を誓う存在であるかという存在の選び取りは、いわば実存の選択であり、意思決定という概念ではとらえられないことを示したのである。つまり、意思決定は可能な代替案の中での最適なものを選択するプロセスであるが、比較するための決定前提として事実前提と価値前提が存在することを必要とするが、決定前と決定後で決定前提が変化する場合は比較ができない。意思決定ではなく、実存的決断という選択の様式を設定しなければならないという点が主張された。

もう一つ重要な論点は、自由な決定ができるのは、実は限定された人間だけであるかもしれないという点である。これは、ストップワードの不条理演劇「ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ」を重ね合わせた議論で、ハムレットの狂気が本物かを探るために、学友のローゼンクランツとギルデンスターンがクローディアス王に招かれ、ハムレットと一緒にイギリス王への使いを命じられる。イギリスに向かう船の中でハムレットは王の手紙を読み、イギリス王にハムレットを殺すように命じていることを知ると、その部分をローゼンクランツとギルデンスターンに書き改める。この二人は作劇術上の必要から、殺される役回りとして設定されている。脇役としての二人の立場からすると、主人公のハムレットは悩むことが許されても、彼らは殺される必然からは逃れることができない。

これを象徴するために、演劇の出だしはふたりがデンマークに向かう船の中から始まる。ふたりは退屈しのぎに金貨を投げる賭けをしているのだが、表しか出ない。確率が成立しない、偶然の働かない世界に入っていることが示唆されている。同じように不条理であるとしても、自分が主人公でないために、巻き込まれざるを得ないことによる不条理では構造が異なるといつてよい。

この点を拡張したのが、日置1991である。ここではネットワーク論の展望にこと寄せて、ネットワークの持つ機能を論じているが、ネットワークで説明することができても大きな問題として生じるのが、ネットワークが場であるのか、主体であるのかが未分化であり、主体であると思つているといつの間にか客体になっていることがしばしば起きることを指摘した。つまり、ゲシュタルト心理学の反転図形のように図と地が交代する可能性がある。自分が主体だと思つていると、いつの間にか対象と

して扱われている。子どものいじめがこのような構造で、いじめているつもりが実は自分がいじめの対象になっているということがしばしば起きる。これはネットワークが行為の主体であると同時に行為の場になっているために起きる現象で、主体と客体の交代はしばしば起きる。このことを考えずに、主体としてのネットワークの賛美を続けると、ネットワーク論の理論的価値は下落しかねない。この論文は学会誌のネットワーク特集に掲載したものであるが、かなり重要な指摘であると思えるが、反応はほとんどなかった。

結局、筆者はこのあたりから、経営人類学の領域に踏み込んでいき、不条理な状況における人間というテーマから離れてゆく。一連の論文で論じた関心は重要な問題であり続けているように思えるが、流行のテーマ以外の関心を追求することはなされないという傾向はますます強まっているように思える。いま振りかえてみると、不条理の中の人間という組織論的テーマが、受け入れられず、場合によっては発表できなかったことは、このテーマが組織論の主要なテーマとして定式化される状態ではなく、試論の段階であったことによるといえる。

5. 紀要の意味

これまでの未発表論文を考えるならば、紀要の役割はかなり大きいといってよい。紀要は発行する部局の性格によって大きく変動する。筆者が所属したのは人文学部で最初の就職をして以来、経済学部を三つ経由して、現在経営学部で所属している。しかし、同じ経済学部でも紀要の性格はかなり異なる。その学部が大学院を持っているか否か、一般教養の教員を含んでいるか否かなどによって紀要の編集は大きく変容する。個別にはさまざまな問題があるが、紀要が何を指すかによってどのような形での編集を行うかが決まってくる。現在、多くの大学で学術誌としての性格を持たせるために、査読(ピア・レビュー)を行っている。しかし、ほとんどのケースでピア・レビューは困難である。なぜなら、同一領域での専門家を三人そろえることはほとんどの大学で不可能である。規模のよほど大きな学部であっても、細分化された現在の社会科学での議論を読みこなすことのできる専門家をそろえることは困難である。しかも、中間領域を考える場合にはほとんど不可能である。経営人類学という領域で紀要に論文を出すことは査読の観点からはきわめて困難であり、経営学者と文化人類学者の両方をスタッフに持つような学部は存在しない。

専門性という意味では限界があるとしても、査読を排除してよいかという点ではやはり行なわれるべきだろ

う。もっとも、内容に踏み込んでの査読は学会で行うべきで、紀要の査読は形式与件を満たしているか否かが中心にならざるを得ない。しかも、査読の対象は同僚であり、査読して不適格と認定することは困難である。実験的な内容であるほど、学会誌であっても査読は困難である。例えば、経営人類学という領域では全世界でも査読ができる人間は30人程度であるだろう。だからといって最先端であるといえるかという点でもかなり疑わしい。まだノーマルサイエンス化が進行していないという理由だけでも査読困難ということになる。逆に、ノーマルサイエンス化が進行した領域では、中間領域は受け入れにくくなってくる。

大学紀要は固有の役割を持っていると考えるべきだろう。紀要論文だからレベルが低いというのではなく、日本型のワーキングペーパーであると位置づけるならばノーマルサイエンスにこだわらず執筆可能な場としてとらえることができる。実は、もう一つ未発表論文になりかけて、それが発表できた論文がある。日置・長谷川1991である。これは、井上章一「美人論」の書評論文であり、日置と弟子の長谷川が対談するという形式で書かれている。実はこの形式は、井上章一と笠谷和比古が対談の形式で雑誌「思想」に天皇制について論じた論文から取っている。つまり、ある意味では井上・笠谷のパロディであり、しかも、その内容を美人論から持ってきているので、二重の意味でのパロディであった。

こんなものを書いたよと井上章一に手渡したのだが、彼は律儀に日文研の紀要編集委員会に届けたため、査読の結果掲載された。この頃は大量に未発表論文を書いていたために、この論文も発表されることはないというつもりで書いていた。このために、行儀の悪い論文で、不要な蛇足をつけたり、結びが論文の体裁になっていなかったりしている。しかし、日文研という本来、学問的に収斂するのではなく、むしろ拡散していくタイプの研究機関であるために、その紀要ではかなりの冒険が許されたといってよい。一つの方向を示唆しているといってよい。紀要をどのように用いるかについては十分に研究の余地がある。二十年以上も紀要に書いていないことになるが、非常勤講師にいった大学の紀要に書かせてもらうなどで、やはり学会誌以外の公表の場を持つことは重要であると思われる。

参考文献

- 飯塚信雄(1986).『男の家政学』.朝日新聞.
今井賢一・塩原勉(編)(1988).『ネットワーク時代の組織戦略』.第一法規.

奥山敏雄 (1991). 『組織の世界』, 吉田民人編. 『社会学の理論でとく現代のしくみ』. 新曜社所収.
塩原勉・日置弘一郎 (1989). 「伝統と信仰の組織」『日本の組織』, 第13巻, 第一法規.
Schutz Alfred (1962). “*Collected Papers I*”, Nijhoff.
ストップワード・トム (1968). 「ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ」『今日の英米演劇5』所収, 白水社.
新島淳良・加々美光行 (1990). 『はるかより闇来つつあ

り』. 田畑書店.
Bern Eric (1964). “*Games People Play*”, Grove Press.
日置弘一郎 (1991). 「ネットワークの倫理と論理」『組織科学』, 25巻2号.
日置弘一郎・長谷川伸子 (1991). 「美人の効能」『日本研究六号』.
劉香織 (1990). 『断髪』. 朝日新聞.

(受付日2016年8月19日 受理日2016年11月25日)